



ちらかといえ、西洋よりも東洋の美術品が多いため、

「あなたは日本語がお上手ですね。お国は中国ですか、それとも朝鮮？なあって聞くお客様が多いんだよ」と、吉田は苦笑する。自らも書道は書宗院無鑑査。また、「庖丁余語」と題して、隨筆・小説集を出している。

物の判る客を好む。そして、物の判る客が彼に魅かれる。水道橋「かつ吉」には、故、三島由紀夫が楯の会の面々を引きつれて、週に二回は通っていたという。木曾のヒノキでできた江戸時代の水道管を使った内装、壁にかけられた山海関の「天下第一関」の清朝の拓を見て、さすがの三島も、吉田をただ物にあらずとにらんだのだろう。

「最近の若い人の中には、明朝をメイチョウ、清朝をセイチョウなんて読む人がいるね。あきれたもんです」

などと手厳しいことをいうが、べつに高踏趣味のディレクターというわけではない。「菩提樹」の壁のレンガは、日本鋼管の古い溶鉱炉を取り壊した物。棟や柱類は旧北白川宮家・高輪御殿の廃材。テーブルの分厚い板は、灘の古い酒樽を分解して作ったものといったぐあい、茶目ッ気たっぶりのアイデアマン。「塵物だろうが、いい物はいんだ」

と、うそぶくのだ。その持ち前の創意工夫を活かし、商売に関してもなかなかの達人とみた。

「僕はね、いつも、オヤジだったらこんなときどうするかって考えながら、自分の動き方を決めるんですよ。性格、生き方ともに父親の血に負うところが大きいですね」

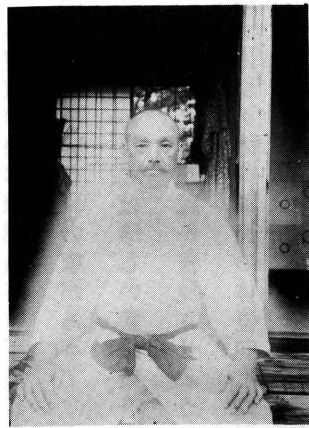
吉田吉之助の旧姓は岩谷。父親は明治の煙草王・岩谷松平である。文明開化期の銀座レンガ街を、赤いフロックコートを着て、これまた赤い馬車に乗って走りまわり、「赤天狗」の異名をたてまつられたこの人物、かつてNHK・TV「歴史への招待」でもとりあげられた一代の風雲児である。

鹿児島県川内市で薩摩藩御用達の造り酒屋を営んでいた岩谷松平は、店が西南戦争の戦火に焼かれると、二十八歳で上京。行商から身を起し、銀座通りに

岩谷商会を開くや、横浜で売れている舶来煙草に目をつけ紙巻煙草の時代到来を察知。「天狗煙草」を売り出した。

新聞広告を最大限に利用し、自らを「東洋煙草大王国益の親玉」と称するなど、奇抜な宣伝によって爆発的な売れゆきを示し、彼は巨万の蓄を得た。我が国の広告の元祖であり、電通の設立発起人でもある。

が、明治三十七年、煙草専売法実施。ライバルだったやはり煙草業者の村井吉兵衛には千二百万円の補償金が支払わ



明治32年(50歳頃)の松平

れたが、愛国者を自称する岩谷は、たった三十六万円で営業権のすべてを政府に献上したのだった。明治四十三年生まれの吉田吉之助は、父親の絶頂期を知らない。

「東京府豊多摩郡渋谷町下渋谷七一五番地というのが、僕が幼少期を過ごした家です。二万五千坪の敷地に千五百坪の家があって、書生と女中が三十人ほどいた。煙草時代が終わって、その頃のオヤジは当時としては珍しい養豚業を営んでいました。日本人は牛肉は食うが豚はなかなか食わない。そこで、なんとか豚を普及させようと考えたんだな。一方、東洋捕鯨株式会社も起こし、海ではクジラ、陸ではブタで、国民の体位向上に尽くすというオヤジらしい考え方だったんです」

人は紫陽花あじさい、七色変る。色が定まりゃ花が散る。この頃の松平が好んで歌ったドイツだという。「紫陽花にかけて、極道の人生を歌ったんだね。小さい頃に聞かされたのに、なぜかいまだによく覚えているんだ」

大正九年三月十日、風雲児・岩谷松平が死んだ。時に吉之助九歳。彼いうところの「生々流転」の人生がこれから始まる

八月の小学校が休みだったある日、執事がきて、こういった。

「吉之助さん、麴町の吉田さんからお迎えがきました」

吉田市恵は信州・有明村の出で、東京高商（現一橋大）卒のキレ者。煙草時代の岩谷商会の番頭だ

った人物である。兄の太内は有明村の村長をしており、吉之助はそこへ引き取られることになったのだ。家産が傾いた旧主の家の遺児を、吉田兄弟で面倒見ようというわけである。

そんなことはツユ知らず、吉之助はあれよあれよというまに、その晩のうちに市恵に連れられて、飯田町駅から汽車に乗せられ、翌朝、松本に着いた。

「松本駅前の白孫という運送屋で、ウナギドンブリを食べたことを覚えている」

さらに信濃鉄道に乗って安曇追分で下車。有明村古厩の吉田家に預けられたのである。

それから十年、吉之助は信州で育った。薩摩人の煙草王の息子変じて信州人——まさに「生々流転」である。

「東京で美食ばかりしていたが、信州では野沢菜ばかり食わされて、おかげで丈夫になった」吉田はそういつて笑う。

有明小学校五年のときのことだ。理科の先生が生徒に「雪がとけたら何になるか」という質問を出した。正解はむろん水である。

「そしたら、「春になる」と答えて、ムチでぶん殴られた奴がいた。僕は笑っちゃったけど、この発想は大事だよ。人生でも商売でも、いろんなことにぶちあたったときに、有明小学校で聞いたあの自由闊達な「名答」を思い出したもんです」

六年生になると、いよいよ松本中学（現松本深志高）受験。ところが担任の先生が芸術家で、バルビゾン派の絵を摸写させたり、子供に夏目漱石、森鷗外、はては孟子まで読ませて、受験勉強どころではない。見事に落第してしまった。師弟ともども心機一転、努力の結果、翌年は合格する。

松本中学では柔道部に所属、体が小さいため、後に選手よりもマネージャーとして後輩の養成にあたった。前日体大学長・清水正一氏も彼の指導を受けている。

「勉強なんかそっちのけで、柔道のことしか考えなかった。だから卒業成績は定員百七十人中百三十六番。上京して吉田市恵さんに成績証明書を見せたら、ずいぶん怒られた。彼は僕を東京高商へ入れたかったんだよ」

それで大和運輸に預けられ、日大商学部の夜学へ。予科から本科に進み、昭和九年に卒業する時は一番だったというから、大変な苦学生だったわけである。

当時は就職難の時代だったが、夜学出身という不利な条件にもかかわらず、東京火災（現安田火災）の入試試験にパス。サラリーマン生活のスタートを切ったものの、その年、徴兵検査を受け、甲種合格となる。

「それを待っていたように、吉田家から婿養子になってくれという申し入れがあった。折しも昭和六年に満洲事変が始まり、戦雲たちこめる頃だから、「命がいくつあっても足りない」と断ると、

「命がなくても来い」というんだよ。その答に負けてね……」

昭和十年一月、六本木の第一連隊に入営。翌十一年、青年将校による反乱、二・二六事件が勃発するが、血の気の多い吉田が傍観者でいるはずがない。

「後に軍法会議で無期禁固の判決を受けた山口一太郎（陸軍大將本庄繁の女婿）のもとで、伍長勤務だった。反乱要図を刷ったのは俺だよ。松本清張の昭和史発掘に俺の名が出ている。牧野伸顕襲撃のための弾薬をごまかして調達したのも俺だ。野中四郎大尉に拳銃を渡したが、その拳銃で野中さんは自決している。赤坂憲兵隊に引っぱられて、連日連夜、さんざんひっぱたかれたね。だけど、ついに白状しなかった」

事件後の軍法会議で、憲兵が「山口大尉の部隊に天野屋利兵衛みたいな兵隊がいた」と証言している。ちなみに、天野屋利兵衛とは、忠臣蔵の大石内蔵介に武器を調達し、役人の拷問を受けてもそのことを白状しなかった人物である。

が、ついに熱海のお宮の松の海岸から残弾が掘り出され、万事休すか……と思えたが、連隊長の粹なほからいで、牛込憲兵隊に配属。憲兵なら逮捕される心配はない。しかし、大陸派遣部隊へ転属される運命が待っていた。

「昭和十一年五月八日、広島から満洲へ向けて出発しました。死地へ向かうんだから、心の抛り所

を求めようと、広島市内の古本屋へ寄ったんだ。で、十銭の岩波文庫の寒山の詩集を買おうとすると、そのオヤジが、兵隊さんだからタダであげるといふんだね。でも、五銭払った。死線（四銭）を越えるというシャレだよ」

南満を転戦。死線を越えるどころか、死線をさ迷うような日が続いたが、昭和十二年三月、東京へ原隊復帰して除隊する。その夏、支那事変が始まった。

東京火災に復帰し、大阪へ転動したが、昭和十四年またも招集を受ける。ノモンハン事変のための部隊編成が始まっていたのだ。

「ところが、歩兵一連隊で兵隊が下士官に殴られ、目が見えなくなるという事件が起きたんだ。僕はリンチを加えた連中の仲間じゃなかったんだが、犯人を自首させる責任を負う立場にたたされたところ、誰も自首しないので、自分がやったと申し出たんだ。そしたら、重謹慎をくらった。しかし、その間に、他の連中は大陸へ送られて全滅。命びろいしたよ。運がいいっていうんだろうかね」

重謹慎が解けると第一師団本部へ出勤を命ぜられ、昭和十五年五月まで機密書類の取り扱いをする。ここでも、吉田は危い橋を渡るのだ。

「勤務中に、河上肇の本を読んだり、共産党宣言を書き写したりしていたんだ。師団長の副官にバレて、どうなることかと思っただが、これまた粹な人で、不問に付された」

やがて除隊、東京火災に戻り、二番目の子供まで生まれていたのだが、血が騒いでしかたがない。ついに、上司と喧嘩して左遷の憂き目にあう。

「全然、仕事をさせないんだ。やることないから、鈴木香雨という書家呼んで書道を習ったり、ビリヤードにこったりした」

昭和十六年十二月、山口大尉釈放。さっそく駆けつけると、「俺に命をあずけろ」といわれ、以後山口——吉田の「はみだしコンビ」で日本と大陸を股にかけての波乱万丈の日々が始まる——

東京火災をやめ、二人で航空機の脚部を作る萱場製作所に入社。しかし、組織の中におとなしくおさまる二人ではない。なんだかんだと目立ちすぎて、またも退社。こんどは、やはり二人で龍烟鉄鉞りゅうえんてつせんに入社、蒙古の宣化へ渡ることとなった。

「製鉄府経理課長になってね、朝礼で中国人も含めた職員に東方遥拝をさせる習慣を故郷遥拝に変えたんだ。だって、中国人に日本の宮城を拜ませるのは失礼だろ。これがまた上役の逆鱗に触れちゃってね……」

「はみだしコンビ」は、またまたいっしょに退社。山口は山西省へ、吉田は北京へと離ればなれに活路を求めたのであった。そのとき、吉田と運命を共にしたいと申しでた者たちは、中国人三十人、日本人三十人。

北京では、北支派遣軍司令部生産推進隊々長になり、舎藏窟わんふいせんという名を使って王府井の入口で軍の息のかかった事業を始め、六十人を養うことになったのである。

そして、昭和二十年八月十五日、敗戦の日を迎える。

「友だちの李国昌という日本の陸軍士官学校を出た中国人が、いきなり蒋介石軍の北京に衣服と靴を調達してやったんだが、まもなく李はクビになっちゃったんだ。だから、借金は全部、僕が背負うはめになった」

故国への送還を待つ日本人の収容所に収容され、その中で、漢字と英語で名札を書いてやるアルバイト。代書屋である。その代償に受けとった米、麦などを売ってやっと借金を返済するのだが、売りを勤めたのは、蒙古時代に面倒を見た中国人の苦力の息子で、北京の巡査になっていた十八歳の少年であった。

昭和二十一年、吉田吉之助は故国に帰った。山口県仙崎港せんに上陸して、国から支給された金は千円。それから今日まで、彼の人生は前にも増して苦難に満ちたものであったが、こともなげにいうのだ。

「クス屋、骨董屋、花屋、八百屋、ミルクホール、カレーライス屋と、いまの四店を持つまでは何でもやった。『生々流転』ですよ」

(信州の東京・五十六年四月号掲載)